

古代文学に思うこと

犬飼公之

高野正美さんから葉書の連絡があつて、おどろいた。十二月六日までに提出せよという催促であつた。「古代文学の回顧と展望」について書くという約束を迂闊にもすっかり忘れていたのだ。この企画の連絡を受けた折に、お断りしたいきさつがあり、その通り俗事に忙殺されつづけていたのである。「回顧と展望」ということばにこだわらず、自分の研究の紹介でもお書きなさいという方もあつて、その口ぐるま(?)にのつて安うけあいしていたのだ。

古代の文学は、古代という時間の制約を越えないし、それが長い歴史に耐えて、適応力を失っていないことによつて粹組まれる。この二つの項目は相反することではむろんない。古代の文学が普く文学としての適応力をもつたためには、正に古代に個有ともいえる輝きをもつことが必要だ。われわれが古代の文学をとらえようとするために、古代の文学がその時代に生きた人びとのことばによる燃焼であり娯楽でありそれへの参加であることのかぎりにおいて、ごくありきたりに言つて、その人びとの思考(あるいは心性というべきかもしれない)をとらえかえし、その真実を見通すことが、是非必要なことの一つであつた。この認定は明らかかな市民権を獲得した。それはこの数年来の、当然といえば当然の一つの成果であつたとい

えるだろう。それが、近代の自然科学的な合理主義という、ほかならぬわれわれの目の前の覆いをひっぱがし、われわれの古層に生きる思考を復権する作業と重つて、長い歴史のひだを一枚一枚はぎとつて、古代の文学のなまなましい輝きをつかみとろうとする試みになつてあらわれているのも至つて当然であつた。

この試みは、いささかの飛翔のしすぎを糺したり、あやうくすでにしまろうとしている逼塞に注意しながら、もっと詳細に深々と、もっと立体的で総量的に進められていいはずである。私はそれを〈影〉の問題を中心にするにすえてとらえてみたいと考えている。

〈影〉が古代の文学にとつてきわめて重大な領域を占有していることは言うまでもない。神の物語などはほとんど〈影〉の領域のうちにくみこまれるのではないかと想われるほどである。

これは本来みえないはずのものが可視の像となるものであり、人間が決して支配しえぬ「存在」としてとらえられていた。人間の生存や「存在」に対する古代思考の、最も根源的な部分に〈影〉はかかわっているらしく想われるのであり、さらには古代王権とも有機的なかかわりをもつものに想われるのである。

私が執拗にかかわつていきたいと考えるもう一つは詞(宮廷詞)についてである。友人はあきれ顔でそれはすでに黴臭い問題だといふ。私は「まめまめしいしつこさで意気軒昂にやつてるよ」と答えることにしている。

宮廷詞人という呼称がかなり一般的に定着し、そうよばれるにふさわしい集団が実体として存在したことは、折口信夫氏が指摘して

以来、さまざまの論議をよんだすえの結論となっているのだが、たしかに今時、これを真正面から扱った論はきわだって少ない。吉永登氏が職業的なそれをまぼろしの存在だと批判して、その存否がきびしく問われたこともあったが、それもすでに一定の決着をみて、宮廷詞人そのものが対象の外に、忘れかけられようとしているのかもしれない。

はじめに折口氏がこれを論じたとき、そこには宮廷詞・人(宮廷詞をうたりひと)の意味と、宮廷・詞人(宮廷の、職業化した詞人)の意味の二つが、入りまざっていた。折口氏の主張の中心が宮廷詞・人とすることにあったことは疑いないが、吉永氏はそのあいまいさの確な批判をあげたのだった。その後の決着はあらためていうまでもない。宮廷にあって歌をうたうことで食俸をえているような存在としては否定されるが、習慣的に歌をめされる一団の人びとの存在は否定しえないことがたしかめられたのだった。つまり宮廷詞人は宮廷詞・人であることの結論をえたのである。

想うにその時点から宮廷詞と宮廷詞人の問題はあらためて出発すべきであったにもかかわらず、かえって人びとの意識の外におかれることになっていく。いったいその後宮廷詞とは何かという問いかけがはたしてあったろうか。宮廷詞史とでもいうものが徹底的に問いなおされたであろうか。それらはむしろ自明のこととしてか忘れ去られてしまっている。

詞は、詩に異ならないが、詩のなかに一つの傾向をもつ集団として古代詩の一面を明らかに担っているのであり、その一つの高みとして宮廷詞が考えられるのではないか。宮廷詞は、宮廷詞であるから

にまつりごとの制約をあらわに負うであろうし、まつりの制約からも逃れることはできないであろう。祭りとは政治と歌のかかわりは宮廷詞に対してもっと問われるべきではないのか。それだけではない。詞の歴史はまつりからまつりごとへとという文学史を最も明らかに体顯しているように想われるし、こころのうちで自らを宮廷詞人となぞらえることの少くなかった大伴家持を含めて、『万葉集』は、そのような宮廷詞人と、彼らが近侍した家の集を中心的な資料として形成されているようにも想われる。詞(宮廷詞)と詞人(宮廷詞人)は古代の文学と文学史の重要な項目でありつづけているように想われる。今、私はインドの女神アプサラス(apsaras)と、詞の姫のむすびつきを考えている。アプサラスは乾闥婆(gandharvas)の妻であり伎女でありへ水の女であった。漢訳仏典にはこの女神が采女へさいにょとある。古代中国の理解では采女であったことを意味する。采女は古代日本のうねめと集合する。アペサラスと采女とうねめが同一であるとは認めがたいにしても、采女論における法制史の果した著しい成果とは異って、ここに宗教史ふうにとどるる姿が浮びあがることは誤りあるまい。それは文学史にとって、特に詞史にとって無視できないものに想われる。だからというのではないが、古代文学を研究する視野はこれからは采女論に限らずインド中国朝鮮を含みこむことが一層必要になっている。